

明川の風景と旧街道「寺山峠」

大坪祥一

室町時代（永禄年代）旅人が武具（日本刀、火縄銃など）をこもに包み、百姓姿に身をやつし、越後から明川の地にわらじをぬいだ。明川の本流（大ぜき）近くに1軒のほったて小屋を建て、猟をし山菜を食すかたわら、田畑を少しづつ開墾した。人が明川に住みついた始まりである。



江戸時代になると、2軒3軒と軒数が増え、江戸時代後期には、10軒程度になり、田畑も広がった。

明川という地名は、川の名前と同じである。水源は熊穴から上の原に到る途中にある。清水は大木の根元から、こんこんと沸き上がっている。水源から流れにそって下る水路は、そり立った山の谷間にあり、熊が出そうな、昼もうす暗い藪である。その谷間を抜けると、天地が、ぱっと広がり、急に明るくなる。その空間が、明川である。（標高 800m.弱）川は利根川につながっている。

江戸時代、田畑が広がり、人口が多くなると、明川の本流（大ぜき）から2本の支流が必要となった。生活用水として、各家に届く水回りと、水田用の水路である。この2本の人工的な支流は、村人が力を合わせて作ったものであろう。上流に分水路があり、明川（大ぜき）から必要に応じて水量を調節し、今でも活用している。上水道は、今では、水源から神社前の水槽にため、いただいている。

茅葺き屋根 囲炉裏 水車(しったたき、ぱったり) 石臼 むしろ はかま もんぺ じゅばん はんてん ののこ 薪 牛馬 そり かっちき 大ぐつ ござれ たがま さま くわ よき のこ うす はち 桑 蚕 稲ワラ 茅場(森の平) 炭焼き きんま引き おす ためかつぎ など 昭和年代戦後まで日常みられた風景である。

黒モチ 赤米 ノギ米 あわ ひえ そば 大豆 小豆 などの穀類も田畑一面に作られていた。あけび やまぶどう うど わらび ぜんまい うり くり とちのみ などよくとれた。

戦後、農地が整備され、機械化が進むと農法も変化した。ダム 道路 家電化 ガス 水道 電気 車 テレビ 洗濯機 レンジ 電話 スキー場 ゴルフ場 温泉民宿など仕事の多様化、生活様式の変化により人々の意識も変化せざるを得なかった。

岩魚 ドジョウ イモリ タニシ カエル 蛍 赤トンボ 熊 猿 イノシシ かもしか きつね たぬき いたち うさぎ リス ヘビ トカゲ トビ ワシ きじ かけす カラススズメなどの動物相も変化した。里村の小動物群が減少し、熊 猿 イノシシなどの害がふえた。

旧街道は、本道として南北を通る『寺山』がある。明川南面の前山を越えると、お寺に通じていた。明川北側には、大沢、大芦、湯の小屋の村々に通じている。かつて、本道



『寺山街道』は人々の往来でにぎわっていた。東側には上の原、茅場（森の平）、山菜とりなどの街道として『熊穴』があり西側には、『大谷地』というだいろくでんに通じる街道がある。今では使われなかったり、道路に寸断され不能になっている。

旧街道の本道『寺山』には、道わきに 道祖神 石仏、前山の山頂に十二様（じゅうにさま）など願いの込められた石仏が時代をみつめ続けている。

明川の東側には、鎮守の杜に『榛名神社』がある。昔は神社の前に中2階の奉納殿があり、獅子舞を奉納した。人々の交流の場、恋の場、縁結びの場とし、霊験あらたかな神社としてにぎわっていた。今でも毎年春になると天下泰平・五穀豊穡を古式に従って祈り、神事を続けている。神社の裏山の丘には、奥の院が静かにたたずんでいる。

明川中央にある豆桜は、江戸時代より村人や旅人をなごまし、やすらぎをあたえ続けている。明川南面前山に藤左衛門桜が対をなし、室町時代より明川を見守っている。山桜の大樹が山のあちこちにあり、春の明川を染めている。



平成 19 年から明川桜の里をめざし、千本以上の桜の植樹も間近である。遊歩道として、前山・寺山・大谷地新道の完成も間近である。

時代が進むほど、激変する明川の風景。次は、どんな風景になるだろうか。